

筑後市の偉人伝

題字

古島小学校校長 下川 善道（蒼田）先生

あいさつ

筑後市では、平成二十八年三月に「筑後市教育大綱」を「教育のまち・ちっこ・ちっこで育ち、ちっこを愛し、ちっこを育てる人づくり」を目標として掲げて策定しました。その中で、基本方針のひとつを「ふるさとちっこへの愛を育てるまちづくりの推進」として、郷土の歴史や伝統文化を理解し、誇りを持ってふるさとちっこを愛する市民の育成を目指しています。この方針を具体的に進める手立ての一つとして、この度「筑後市の偉人伝」を発行するものです。

筑後市には、多くの歴史や伝統文化が残り、各小学校区では今もしっかりと継承されています。

しかしながら、市全体への広がりという点では、不十分であると感じています。そこで、子どもたちが、この冊子を通して筑後市の先人の思いや行いに触れ、その志の高さに尊敬や憧れを抱くことで、「ふるさとちっこ」に誇りと愛着が生まれ、地域の文化が市全体の文化へと広がってほしいと願っています。是非とも、子どもたちには、気軽に手に取って読んでほしいと思います。また、伝記を読むことは、人の生き方の普遍の価値に出会うことにつながるものと考えています。この小冊子での筑後市の偉人との出会いが、その後の更なる様々な生き方との出会いにつながることを期待しています。

結びに、本書発行にあたり、ご協力を頂きました関係小学校の校長先生、教頭先生方へ、心からの謝意を表します。

平成三十年三月

筑後市教育委員会 教育長 中村 英司

筑後市の偉人伝 もくじ

人物伝一	日源上人（にちげんしょうにん）	1
人物伝二	中島安平（なかしまやすへい）	5
人物伝三	秋津嶋浪右衛門（あきつしまなみえもん）	9
人物伝四	眞木和泉守保臣（まきいずみのかみやすおみ）	13
人物伝五	益田素平（ますだそへい）	17

『筑後市の偉人伝』マップ	21
--------------	----

参考資料	23
------	----

『筑後市の偉人伝』編集委員	23
---------------	----



日源上人

（生誕不詳〜一六〇九年）



▲日源上人銅像

日源上人と溝口

慶長五年（一六〇〇）に起こった関ヶ原の戦いより五年前の文禄四年（一五九五）のころ、全国行脚していた日源という名の上人が溝口に立ち寄りました。当時の溝口は、武士同士によるたくさん

越前（現在の福井県）から来た日源は、この溝口の荒廃した様子にとっても心を傷めました。そして、どうにかしてこの村を豊かにする方法はないかと考えました。溝口の近くには、大きくて水が清らかな矢部川が流れ、山には紙の材料となる楮がたくさん自生しており、和紙作りにとっても良い環境でした。そこで日源は、故郷である越前で作っている和紙を溝口で作ることを思いつきました。さっそく日源は、故郷から一族を三人呼び、廃寺となっていた福王寺を作業場

にして、手すき和紙の製作に取り組みました。この溝口で始まった和紙作りは、当時溝口を支配していた柳川城主の立花宗茂に伝わりました。

※行脚：僧が諸国をめぐり歩いて修行すること。

※優れたお坊さんのこと。

※荒廃：荒れはてること。

※自生：植物が自然に生え育つこと。

※廃寺：管理されなくなったお寺のこと。

紙と藩政

溝口で和紙が作られ始めたことを知った宗茂は、日源たちが和紙を作りやすいように、屋敷や田を与え、和紙作りに必要な道具も支給し、年貢などの一部を免除しました。これによって、日源たちはよりいっそう和紙作りに力が入るようになりました。

江戸時代になって溝口は宗茂から筑後国主田中吉政が治めるようになり、吉政も宗茂のように溝口の和紙作りを藩御用紙として取り立てて援助しました。

この後、元和六年（一六二〇）に有馬豊氏が久留米藩主として入藩してから、これまでと同様に藩御用紙を生産し続けました。

※藩御用紙：藩に納める特別な紙。



▲楮

溝口の繁栄

日源は、慶長十四年（一六〇九）に亡くなったと伝えられていますが、それ以降も溝口では、多くの家で和紙が作られ続けていきました。さらに、この技術は溝口だけでなく、矢部川流域の八女市やみやま市にも伝わり、紙が作られるようになりしました。また、佐賀県などからもこの技術を学びに来るほど、九州の中でも重要な場所となっていました。明治時代には「筑後紙」という名前で、九州だけでなく日本全国に広がるほど有名になりました。

多いときには一七七九戸もあった溝口の手すき和紙業者は、西洋紙の普及により、現在は一戸のみとなってしまいました。しかし、日源と和紙の歴史は、溝口の福王寺や共同納骨堂内の壁画などによって、地元の人々に語り継がれています。古川小学校の五年生は、毎年四月十三日に、溝口の福王寺で行われる日源上人顕彰祭で、「日源上人のうた」を披露して、その偉業を讃えています。

※壁画の作者は井上三綱（筑後市出身の有名な画家）。

日源上人のうた

作詞 藤吉 周蔵・山口 真砂子
作曲 元田 直樹

一 矢部川の岸にたたずむ行脚僧

紙漉の業授けまた

法を広めて 潤おさん
確き覚悟の 日源上人

三 福王寺の庭に立ちたる銅像に

永久に讃えん その偉業

長く忘れじ その御恩
九州紙の祖 日源上人

二 筑後路に 溝口紙はひろまりぬ

矢部の流れに そえる里
紙をすかざる 家はなし
努力実りぬ 日源上人



▲日源上人顕彰祭のようす

二

中島安平

(一六七八年〜一七五八年)

久富村と水の問題

中島安平は、江戸時代に徳久から久富まで続く久富用水を拓いた人物です。

そのころの筑後地方は、今よりもっと水田が広がっており、たくさんのお米が作られていました。そのため、稲を育てるのに必要な水を得ることはとても大切なことでした。しかし、久富は、まわりよりも高いところにあるため、川の水を田んぼの中に引くことが難しい場所でした。そのため、村の人た



▲久富用水の略図

ちは小さな溜池に頼っていました。そのような中、安平は、延宝六年(一六七八)に久富の百姓の家に生まれました。小さいころから水の問題を知っていた安平は、これを解決するために立ち上がり

ました。

久富用水の計画と工事

まず安平は、地形をくわしく調べ、どうしたら久富に水を引くことが可能かを考えました。そして、徳久から水を引いてくることを考えました。しかし、徳久から久富まで水を引くには、羽犬塚を横切る必要があります、実現するためにはとても難しい工事を行わなければいけませんでした。

安平は、用水路に必要な井堰の位置を表した図と用水路を開く計画書を持って久留米藩に願い出ましたが、完成させることが難しい工事ということで許されませんでした。しかし、安平はあきらめず二回目も願い出しました。すると、近くの村々から「川の水が足りなくなる」、「こう水が起こる」などの理由により反対の声が上がりました。安平は、世間を騒がせたとして牢に入れられてしまいました。あきらめずに牢から出た後、氏神の熊



▲現在に残る久富用水

のじんじや じようじゆきがん おこな
野神社で成就祈願を行い、三回目を願い出ました。この熱意に久留米藩が動かさ
れ、「工事が完成しなかったときには、安平の命はない」という厳しい条件で許
しが出されました。

これによって、安平は村の人々の協力を得て命がけの工事を始めました。用水
路を拓くためには、人の力で土を掘っていくしかありません。また、井堰も低い
ところから高いところに水を引き上げるため、大きく立派なものを造らなければ
なりません。そのため、許可が出されてから完成するまでに三十年もかかっ
たといわれています。その間に、仕事をしながら工事を行うため生活が苦しくな
り、村人の中に工事から離れていく人も出てきて、一時工事が中断した時期があ
るといわれています。それでも安平は、あきらめることなく、自分の財産を投げ
出して、よその村からも人々を集めて工事を続けました。

久富用水の完成

完成した用水路は幅二メートル、長さ三キロメートルにも及び、安平は寛延三
年（一七五〇）に、願いが叶ったことに感謝して氏神の熊野神社に鳥居を建てま
した。

久富用水のおかげで久富の水不足はなくなりました。さらに、久富だけでなく、
若菜や熊野にも水が流れるようになり、たくさん新しい水田が拓かれました。
また、安平は久富用水の他に「四十八堀」と呼ばれる溜池を掘り、久富を潤し
ました。このうちのいくつかは、現在でも残っています。

安平は、八十歳のころ亡くなりました。お墓は久富の納骨堂にあります。久富
の人々は、用水神社を建てて安平の立派な行動を讃えました。
久富用水の一部は、今も農業用水として利用されています。



▲中島安平のお墓



▲用水神社

三

秋津嶋浪右衛門

(一六九七年〜一七四三年)



▲秋津嶋浪右衛門肖像画
(「あずみうどん柳川」より)

幼いころの浪右衛門

津島には昔、「日本第一」といわれた「秋津嶋浪右衛門」という強い力士がいました。浪右衛門は、元禄十年(一六九七)に生まれました。小さいころから体が大きく強かったと伝えられており、地元には、次のような物語が残っています。

浪右衛門は、子どものころから体は大きいのに弱虫だったため、近所の子ども達にいじめられていました。そこで両親は、「瀬高の清水観音様にお参りしてたくましくなるよう願をかけなさい」といいつけました。浪右衛門は、それから毎朝二里(約八キロ)の道のりをお参りすることになりました。満願の四十九日目、いつものように観音様にお参りをすませた浪右衛門は、帰りの山道で

子牛ほどもある大きなカブトムシと出くわしました。浪右衛門がカブトムシに近づくと、角を振りかざして浪右衛門を押し倒そうとしたので、浪右衛門も負けじと押し返しました。

半刻(約一時間)ほどたち、浪右衛門はやつのことでカブトムシを道の脇に押し出し、そこを通ることができました。身体中が汗でびっしりになったので、近くの石に腰を下ろし手ぬぐいで汗を拭き、その濡れた手ぬぐいをしばらくと簡単に切れてしまいました。実は先ほどのカブトムシは観音様の化身で、浪右衛門は押し合いの間に観音様から力を授かっていたのでした。

江戸大相撲デビュー

浪右衛門は十九歳のときに力士になるために江戸(現在の東京都)に向かいました。そのころ、相撲の人気は庶民の間でも高く、江戸にはたくさん力士が集まっていました。その中でも浪右衛門は、身長が百八十七センチメートルで、体重が約百四十二キログラムもある大男でした。さらに、もともと真面目な性格で毎日けいこを熱心に励んでいたため、相撲の成績はみるみる上がり有名になりま

した。また、だれにでも優しく、落ち着きがあり、困っている人がいるとすぐに助ける、とても立派な人で、多くの人からまるで父や兄のように慕われ、力士たちからは尊敬されていました。

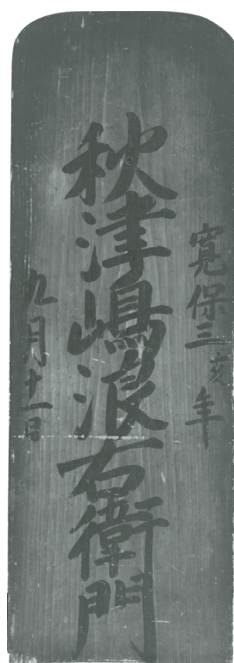
浪右衛門のその後

しかし、浪右衛門は寛保二年（一七四二）、四十七歳のときに病気が原因で現役を引退しました。そして、その翌年の寛保三年（一七四三）に四十八歳でこの世を去りました。その百年後、八女市出身の力士揚羽空右衛門が、地元の人々と協力して、寄附を集めて供養塔を建てました。この供養塔の正面には、「日本第一」という文字が刻まれ、浪右衛門の力士としての活躍が記されています。この供養塔は、江戸時代の街道の傍に建てられており、当時この道を通る力士たちは、参拝をして



▲秋津嶋浪右衛門供養塔

て前を通りました。さらに昭和の横綱として有名な若乃花や柏戸、大鵬も供養塔の参拝に訪れました。このように、浪右衛門は、活躍していた時代だけでなく、その後も多くの人々に親しまれ続けています。浪右衛門の供養塔は、平成二十八年四月十九日に、筑後市の指定文化財に登録されました。



▲秋津嶋浪右衛門の位牌（X線写真）



▲眞木和泉守肖像画

水天宮の神職

眞木和泉守保臣は、坂本龍馬や西郷隆盛と同じ時代に生き、日本の将来を思い活動し、日本全国に多くの影響を与えた※勤王家です。

和泉守は、文化十年(一八一三)に現在の久留米市にある水天宮の神職の家に長男として生まれまし、国を治めるのは武家ではなく天皇で

た。幼いころから父親の影響を受けて育ち、国を治めるのは武家ではなく天皇であるという考えをもっていました。

文政六年(一八二三)、和泉守が十一歳のころ、父親が病氣によって亡くなつたため、和泉守が神職を継ぎ、その職をしっかりと勤めました。また、学問にも励み、古い時代の日本の思想や和歌、武術も学びました。そして、水戸(現在の茨城県)へ行き、多くの人が学んだ水戸学から政治について学びました。やがて、

久留米に戻った和泉守は、藩の政治に対して意見を述べるようになりました。

しかし、意見の対立から、和泉守は政治を混乱させたとして神職を解かれ、弟の住んでいる水田に移り住むように命じられました。

※勤王家：武士ではなく、天皇が中心となって政治を行うべきと考え、運動を起こした人々のこと。

山梔窩での暮らし

水田では、弟の屋敷の中に小さな一軒家を建て、その建物を「山梔窩」と名付けました。「山梔」とは植物の「くちなし」のことで、藩の政治に口を出し、久留米から追い出されたため、今後「口を出さない」という意味が込められていました。

水田での生活は、読書をして過ごし、食事などは自分で用意するという質素なものでした。しかし、多くの青年たちが和泉守から教育を受けたいと願ひ、山梔窩を訪れました。この青年たちの願ひに応えて和泉守は、「山



▲山梔窩

「梶窩塾」を設立し、学問だけではなく、作詩、習字、相撲、弓道、剣道なども教え、国家のためになる人材の育成に努めました。

勤王運動

そうした生活を送っている中、黒船の来航などにより国内では大きな変化が起こっていました。和泉守は、文久二年（一八六二）に、薩摩藩（現在の鹿児島）の島津久光が幕府を倒すため上京することを聞きつけ、これに同行しようと山梶から脱出して薩摩に向かいましたが会えず、単独で京都へ向かいました。しかし、京都伏見で起こった「寺田屋騒動」で捕えられ、久留米で幽閉されました。久留米藩は、国内の混乱による影響から、和泉守への対応がはっきりとしないまま保釈と拘束を繰り返して行いましたが、文久三年（一八六三）に和泉守を許し、藩の親兵隊隊長として上京することを命令しました。

和泉守は、上京の途中に長州（現在の山口県）に立ち寄り、藩主の毛利敬親に会って信念を伝えると、敬親から厚い信頼を得たうえ、多くの品々が贈られました。また、京都では、孝明天皇から褒美を賜り、多くの志士たちからは「今楠公」と呼ばれるほど尊敬されました。

和泉守は、江戸幕府を倒す計画を着々と進めていきましたが、突然起こった「八月十八日の政変」によって京都での活動が困難となり、一旦は長州へ退くことになりました。元治元年（一八六四）になると、長州藩と一緒に再び上京し「禁門の変」で幕府と戦いましたが、敗退しました。和泉守は、天王山に退き態勢を整えようとしたが、事件の責任を取り自ら命を絶ちました。

和泉守は、最後まで勤王の意志を曲げず、その意志は、多くの青年たちによって受け継がれていきました。そして、明治という新しい時代への扉を開く先駆けとして大きな役割を果たしました。

昭和四十三年（一九六八）、和泉守が住んでいた山梶窩は、現在地に移築・修復され、県指定史跡に指定されました。

益田素平の研究



▲益田素平写真
(『筑後二川郷土史』より)

益田素平は、天保十四年(一八四三)に江口の代表である庄屋の家に生まれ、日本農業技術史に広く名を残す研究を行った人物です。

素平は、小さいころから勉強に励み、十七歳になると父の跡を継いで庄屋職に就きました。そして、そのころ多くの農家を悩ませていた原因不明の稲枯れを解決するため、

自分で研究を始めました。

研究と開発

素平は、稲枯れの研究を重ね、その原因が、「三化めい蛾」という蛾であることを発見しました。さらに、稲の収穫後に切り株を燃やすことで、次の年の虫の数を減らせ

ることを突き止めました。

素平は、この実験結果を福岡県の役所に伝えて、稲枯れを防ぐ方法を農家の人々に広めるようお願いしました。

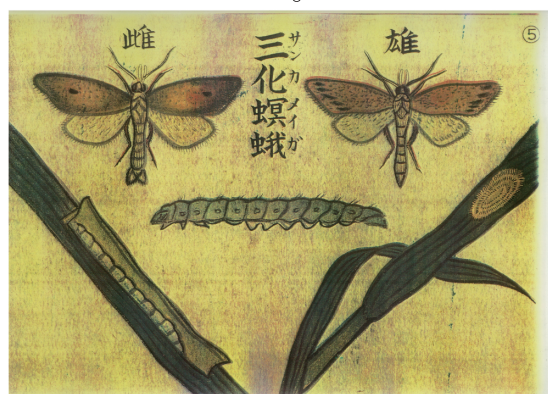
しかし、この方法は、農家にとって大変な作業であるにもかかわらず、役所や指導者たちが、強制的に進めました。

そのために「筑後稲株騒動」といわれる大きな反対運動が起こりました。

筑後稲株騒動

筑後稲株騒動では、素平や素平とともにこの方法を勧めた人々の家が次々に襲われました。しかし、素平は逃げ出さず、「何でこれくらいのことであきらめようか。めい蛾による被害はますます増えて、収穫が全くない田もある。農村を救うためなら、どんなに危ない目にあっても本望だ」と言い、人々を説得しようとした。

この騒動は、警察が出動することによって収まりましたが、騒動に参加した人が八百人にもおよび、五十人が逮捕される大きな事件になりました。しかし、これによ



▲三化めい蛾 (紙芝居『益田素平』より)

素平の活躍

て、めい蛾被害について多くの農家が考えるようになりました。その後、[※]「稲株掘取り焼却法」が広まりました。また、素平は、稲株を掘り取る大変な作業を楽にできるように「かぶきり」という道具を考え出しました。この発明品のおかげでめい蛾の被害がなくなっていき、多くの田に稲が育つようになりました。

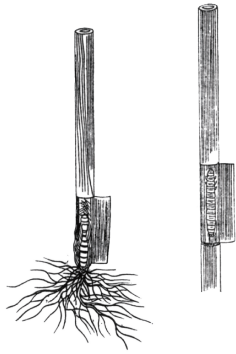


▲かぶきり
(筑後市郷土資料館所蔵)

明治二十二年（一八八九）、素平は新しくできた二川村の村長になりました。明治二十九年（一八九六）には、めい蛾対策を全部の農地に対して村全体で行うなど、めい蛾被害をなくすために力を注ぎました。この方法は、稲を育てるために欠かせない作業として、九州だけでなく全国に広がり、農薬が使われるようになる一九五〇年代ごろまで続けられました。素平の活躍は、大日本農会やさまざまな会から表彰を受けるほどでした。

明治三十六年（一九〇三）十月十七日、素平は六十一歳のときに病気で亡くなりました。その人生はめい蛾被害をなくすための研究・開発を通し、努力し続けることの大切さや困難に立ち向かう勇気を伝える活動そのものでした。

※稲株掘取り焼却法（『稲蟲實驗録』より）



①稲株の中に三化めい蛾の卵を見つける



②かぶきりで根元から稲株を切って燃やす

参考資料

- ◆『筑後市の文化財―平成十六年度版―』筑後市教育委員会 二〇〇五年
- ◆『筑後市史』一卷・二巻 筑後市史編纂委員会 筑後市
- ◆『古川むらの生いたちの記』筑後市教育委員会 筑後郷土史研究会 一九七一年
- ◆『みやまの人と歩み』みやま市史編集委員会 みやま市 二〇一四年
- ◆『筑後二川郷土史』筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 一九八三年
- ◆『稲蟲實驗録 全』写し 益田素平著 森岡書店蔵版
- ◆『日本相撲大鑑』窪寺 紘一著 (株)新人物往来社 一九九二年
- ◆『日本第一 秋津島浪右衛門の伝記』筑後郷土史研究会 一九六三年
- ◆『郷土の鏡 大関秋津島浪右衛門』高口日文著 二〇〇六年
- ◆『日本相撲史』酒井 忠正著 日本相撲協会 一九六四年
- ◆『真木和泉守』佐々木信一著
- ◆『水田校区郷土史』筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 一九八一年
- ◆『筑後水洗郷土史』筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 一九八六年

『筑後市の偉人伝』編集委員（敬称略）

- 安永 努（二川小学校校長）
- 塩山 卓司（水田小学校校長）
- 下川 善道（古島小学校校長）
- 近藤 光博（古川小学校教頭）
- 古賀 圭祐（松原小学校教頭）

筑後市の偉人伝

発行年月 平成三十年三月

編集 筑後市の偉人伝編集委員会
発行 筑後市教育委員会

〒八三三・八六〇一

福岡県筑後市大字山ノ井八九八

印刷 (株)ヒガシ印刷